
僕のありふれた？日常～雨・踏切の女の子～

荻原あきこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕のありふれた？日常〜雨・踏切の女の子〜

【Nコード】

N2623F

【作者名】

荻原あきこ

【あらすじ】

黒猫と鈴の音の主人公のまたもありふれた…？お話です。そう…僕にとってありふれた話ですよ。

僕に靈感があるかは定かではないが…。

あの女の子は何だったのか……。

今でもはつきりと覚えている。

雨の中傘をさし、じっと僕を見つめるあの瞳を。

あの日僕は久しぶりに降った雨に悩まされていた。

「あゝあ…最悪」

僕は傘を持っていなかったのだ。

「マジ…最悪…」

だから、ちょっとその辺の店で雨宿りをしているとこです。

「あれ？何してんのお前？」

「ん……？」

僕はそんな声に、横を見た。

「……吉川？」

僕がボソッと名前を呟くと、そいつは懐かしそうに僕を見た。

「久しぶりだな。覚えててくれて嬉しいぜ」

そいつは…吉川浩平はそう言うと、嬉しそうに笑った。

吉川浩平。

僕の中学時代の友達。

高校が別々だったから、高校に入ってからはずっと会っていないかった。

「元気してたか？」

「ああ。僕は至って元気だよ。吉川は？」

「俺はこの通り。…でもなあ…最近彼女に振られてさあ……。誰かいいい子紹介してくんね？」

久しぶりに会った友達に言うセリフかそれ……？

「…いいよ。うちのクラスには可愛い子が多いからね。そのうち紹介してあげるよ」

「マジで！？流石俺の親友！」

あれ？友達じゃなくて、親友だったのか？

僕は友達のみまで良かったんだけど…。

なんてこと、言わない方がいいな。

「つか、お前…傘持っていないんだろ？入れてやろうか？」

「うん？男と相合い傘か…。ちょっと抵抗感があるけど。せっかくだし吉川の好意に甘えるよ」

「…お前は素直に入れて下さいって言えないのかよ……。お前はいつも一々一言多いんだから…」

吉川が呆れたようにそう言って、黒い傘をバンツと開く。

「俺だって、男と相合い傘なんて……。けどよ、親友が困って………」

吉川が何かブツブツ言っているけど無視した。

しばらく歩くと、踏切にさしかかった。

こここの踏切は開くまで、結構時間がかかる。

「ん……？」

僕がたまたま横を見ると、小さな幼稚園服姿の女の子が、黄色い傘をさして立っていた。

「君……1人？」

吉川はなんか1人で勝手にベラベラしゃべってるし……。

僕は女の子に話しかけてみた。

「……………」

女の子は無言のまま、コクリと頷いた。

「お母さんは？」

「……………」

僕のその問いかけに、女の子は一瞬顔を曇らせ、すぐに無表情に戻り、フルフルと首を横に振った。

悪いことを聞いてしまっただろうか…？

「そっ…そっか。……………！踏切…開いた。ねえ、お兄ちゃんと一緒にあっちまで行こうか？」

踏切が開き、僕がその女の子に問いかけると、女の子はまた首を横に振った。

「そっ？」

僕は不思議に思いながらも、ひとりでに勝手に先に行ってしまった吉川を追いかけた。

その所為で結局雨に濡れてしまい、傘に入れてもらいう意味がなくな
ってしまった。

「…………ッ…………」

僕は急に感じた視線に後ろに振り返った。

「……………!?!」

もう踏切は遠くなってしまった。

だけど僕は踏切に目が釘付けになった。あの女の子がまだ、踏切前
に立っていた。

遠くからでも分かる、じっと僕を見つめるあの瞳。

僕は急に寒気がして、女の子から顔を逸らした。

「つかさあ……」

「なっ……なに？」

吉川が急に口を開き、話しかけてきた。僕は焦って、吉川を見た。

「お前、誰に話しかけてたの？」

「は………？」

「踏切のところでさ、君……1人？とか、お母さんは？とか……。誰に向

かつて話しかけてんのかと……」

は……。

え……。

「はたから見たら危ない人に見えたぜ」

吉川がそう言つて、苦笑した。

「え……？ちよつと待て……？あれ……意味分かんないんだけど……」

「……いや、俺が意味分かんないし」

僕はもう一度、踏切の方に振り返った。

「いな……い……」

そこにはもうあの女の子の姿はなかった。

――

それから数日後。

僕はまたあの踏切前にいた。

今度は1人。

「……？」

ふとあることに気付いた。

踏切の端つこに、花やお菓子などが供えられていることに気付いた。

“あきちゃん。安らかに眠ってください”

そう書かれた花瓶。

「まさかな……」

僕はボソツと呟いて、踏切を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2623f/>

僕のありふれた？日常～雨・踏切の女の子～

2011年1月15日23時36分発行